

平安京左京九条三坊十町

—パシフィックレビュー京都駅前新築に伴う調査—

2006年

古代文化調査会



例　　言

1. 本書は、古代文化調査会が京都市南区東九条上殿田町において、(株)中川工務店によるマンション(パシフィックレビュー京都駅前)新築に伴い実施した平安京左京九条三坊十町跡の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は、(株)中川工務店より委託を受けた古代文化調査会の家崎孝治が担当した。
3. 調査にあたっては、京都市埋蔵文化財調査センターの指導を受けた。
4. 本書の編集は家崎がおこなった。
5. 報告書作成においては、上村憲章の協力を得た。図面及び遺物整理は、上垣雅子、須貝淑恵、山口由希子が分担し、遺物の実測は上垣、須貝が担当した。
6. 本書の執筆分担は次の通りである。
I・II・III・V 家崎 IV 上村

7. 本書で使用した方位及び座標の数値は平面直角座標系VIによる。記載した数値はm単位で、水準はT.P.である。
8. 本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の2500分の1の地図(京都駅・梅小路)を調整し、使用した。
9. 土壌及び土器・瓦類の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準じた。
10. 遺物番号は実測図・拓本・写真ともに共通している。
11. 発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。(所属・敬称略、五十音順)

石田恵一 石田志朗 井深博保 馬瀬智光 梶川敏夫 北崎仁志 北田栄造
工藤康弘 小森俊寛 重松健治 中川雅勝 野口達司 長谷川行孝 林 久徳
古田耕治 古田隆志 堀 大輔 三木茂弘 宮原健吾
(株)明輝建設 (株)礎一級建築士事務所 (株)大高建設
(財)京都市埋蔵文化財研究所 (有)京都編集工房 (株)東洋設計事務所
(株)中川工務店

本文目次

平安京左京九条三坊十町

I 調査の経緯	1
II 調査の経過	1
III 遺構	2
IV 遺物	7
V 小結	10

図版目次

図版 1 遺跡	第 2 面・第 3 面遺構実測図
図版 2 遺跡	1 第 1 面全景（南東から） 2 第 2 面全景（東南東から）
図版 3 遺跡	1 第 2 面全景東部（南東から） 2 第 2 面全景東南部（東から）
図版 4 遺跡	1 第 3 面全景（東から） 2 第 3 面北西部（南東から）
図版 5 遺跡	1 第 3 面東南部（東から） 2 第 3 面西部（東から）
図版 6 遺跡	1 調査地遠景（東から） 2 建物01・03（東から） 3 柱穴113〔建物01〕（東から） 4 建物02（東から） 5 柱穴226〔建物02〕（西から） 6 柱穴230〔建物02〕（西から）

7 柱穴302〔建物04〕(東から)

8 土壙308(南から)

図版7 遺跡 1 井戸339(南から)

2 井戸312(南から)

3 井戸312断ち割り状況(南から)

4 池338(南から)

5 柱穴362〔建物201〕(東から)

6 柱穴376〔建物201〕(東から)

7 柱穴397〔建物202〕(西から)

8 柱穴397断ち割り状況〔建物202〕(西から)

図版8 遺物 池338・井戸312出土遺物

図版9 遺物 落ち込み405・井戸339・土壙256・井戸312・第13層出土遺物

挿 図 目 次

図1 調査地位置図	1
図2 平安京条坊と調査地位置図	2
図3 四行八門と調査位置関係図	2
図4 調査区北壁断面図	3
図5 建物201・202実測図	4
図6 建物01～04・塀05・06実測図	5
図7 井戸312実測図	6
図8 土壙308・井戸339実測図	7
図9 出土遺物実測図	8
図10 軒瓦拓影・実測図	10

表 目 次

表1 遺物観察表	12
----------	----



平安京左京九条三坊十町

I 調査の経緯

調査地は、京都市南区東九条上殿田町31-1である。当該地は周知の遺跡・平安京跡及び弥生から古墳時代の集落跡・烏丸町遺跡に含まれるところである。2004年の秋、当地に中川工務店によるマンション建設の計画がなされた。工事に先立ち、京都市埋蔵文化財調査センターが2004年11月9日に試掘調査をおこなった。調査の結果、地表下0.7mにおいて、中世の土壙や掘立柱跡などが良好な状態で遺存していることが判明し、発掘調査の必要性が考慮されるに至った。東洋設計事務所から古代文化調査会に発掘調査の照会があり、センターの指導の下、施主である中川工務店と三者協議をおこなった結果、2004年11月25日より当調査会が発掘調査をおこなうこととなった。

II 調査の経過

当該地は、平安京の条坊復原の上では平安京左京九条三坊十町にあたり、北側が針小路、南側が九条坊門小路、西側が室町小路、東側が烏丸小路に囲まれたところである。調査地は、烏丸小路に東面し、調査地の北部が西四行北三門の南辺部にあたり、その大部分が西四行北四門の占地にはば重なる。文献史料（九条家文書）によれば、当地は平安時代においては施薬院の

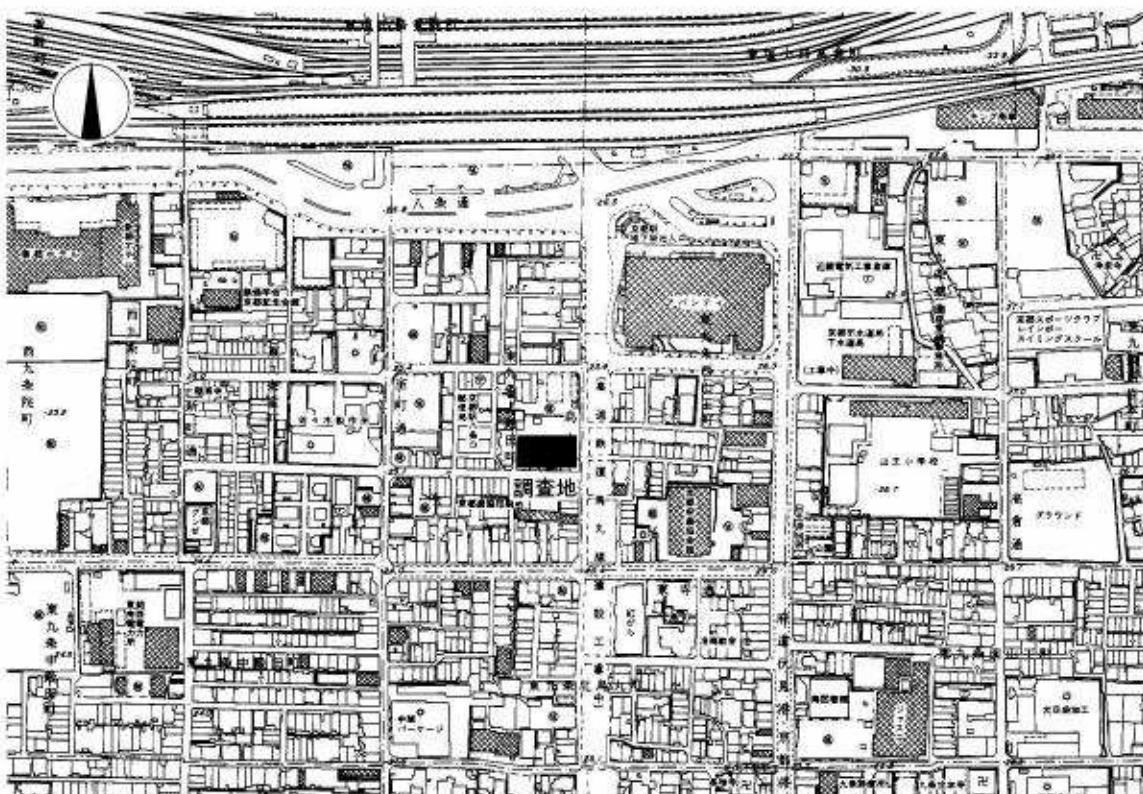


図1 調査地位置図 (1/5000)

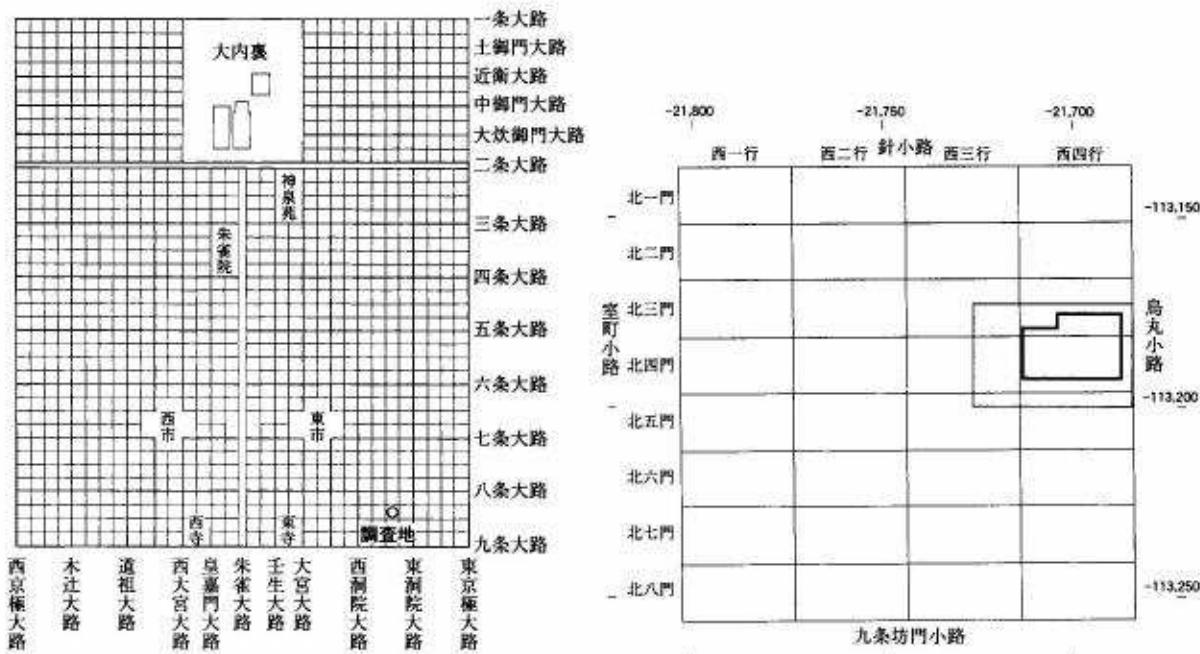


図2 平安京条坊と調査位置図

図3 四行八門と調査位置関係図(1/2000)

御倉が置かれ、鎌倉時代には九条家の領地となったことが記録として残っている。^{註1}施薬院はここから二町程西側の左京九条三坊三町に置かれた。また南西隣接地の六町には藤原師輔の九条殿があったところでもある。

調査にあたっては、試掘調査の結果より、敷地の西半が湿地状堆積が認められたため東側を中心として調査区を設定した。また周辺の今までの調査で古墳時代の住居跡などが見つかっており、平安時代以前の遺跡の有無に留意して調査をおこなった。

実際の調査においては、江戸時代以降の土層を機械力によって除去したのち、以下の調査を開始した。

発掘調査は2004年11月25日より開始し、2005年1月24日までの41日間実施した。調査面積は400m²であった。遺構面は3面あり、調査の延べ面積は1200m²となった。

なお、調査の方法については、(財) 京都市埋蔵文化財研究所の平面直角座標系VIによる平安京の復原モデル60を使用し、調査区の北東角を原点(X-113176, Y-21684)とする、東西方向にローマ数字を、南北方向にアルファベットを記号として付し、4mグリッドを基本とする遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。

III 遺構

基本層序は、地表下0.5~0.6mまで盛土及び江戸~近代までの耕作土が堆積する。その下に0.2~0.3m程の厚さで中世の整地層(第13・14層)が2面あり、以下東半部は暗灰黄色礫砂層、西半部では灰色泥土層のベースとなる。江戸時代以降の耕作土を除去した第1面(第13層上面)において多数の溝・暗渠を検出した。これらの大半の溝は座標軸の北に対して東へ2°前後の

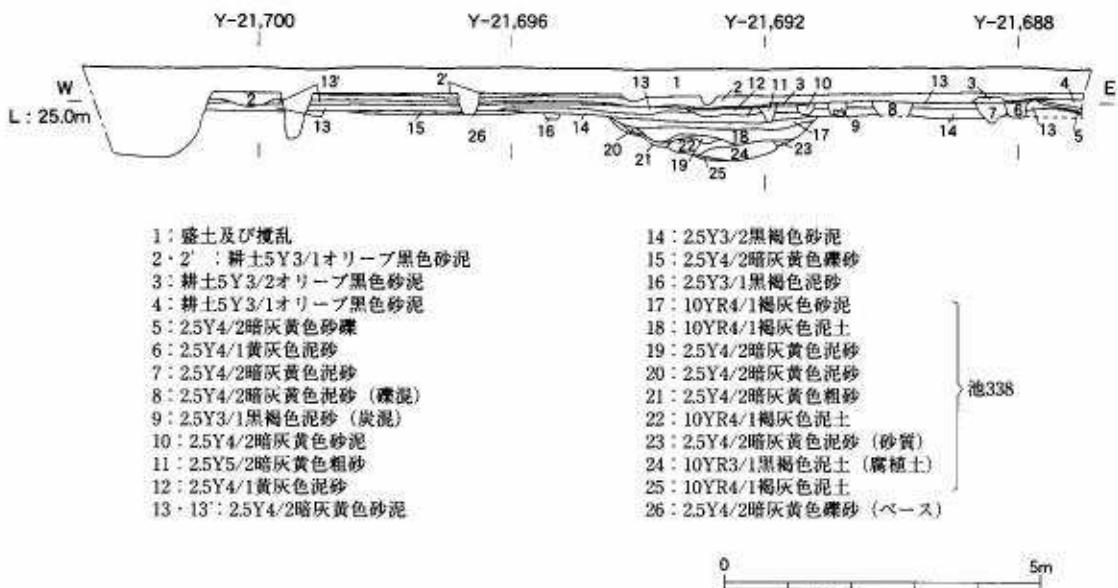


図4 調査区北壁断面図 (1/120)

振れをもっている。溝のほかには土壤、落ち込み、掘立柱、杭跡などを検出したが、この第1面の遺構はいずれも江戸時代から近代にかけての耕作に伴うものである。

本報告では第2・第3面の主要な遺構について以下概述する。

平安時代

第14層（整地層2）を除去した第3面において平安時代前期の掘立柱建物群を検出した。第3面の基盤層は調査区の東半部が暗黄灰色礫砂層、西半部が灰色泥土層である。掘立柱建物は西半部の灰色泥土層が広がる地域に集中する。掘立柱跡のほかには土壙、溝、池跡などがある。

建物201（図5・図版1・4の1・5の2・7の5と6）

調査区の西南角に位置する。東西2間(4.1m)、南北2間(5.4m)以上の南北棟である。梁間は1間7尺となろう。桁行は柱間寸法が9尺等間であるが、3間目以南は調査区外のため不明である。柱穴362は一辺が0.7mの方形の掘形をもち、柱底には板状の礎板が残存する。柱穴376には0.2m四方、厚さ2cm程の板状の礎板が残存する。溝340と切り合い関係にあり、建物201が新期に属する。

建物202（図5・図版1・4の1・5の2・7の7と8）

建物201と重なるが、直接の切り合い関係はないが、建て替えの関係にあろう。東西2間(4.8m)、南北1間(3m)以上、おそらく南北棟と考えられる。梁間の柱間寸法は8尺を測り、桁行は10尺である。いずれも柱穴の掘形は一辺0.6~0.7mの方形を呈し、残存深は0.1~0.3mを測る。柱穴397は径0.2mの柱根が良好な状態で遺存する。残存高0.3mを測る。池338と同時期の土器類が出土している。

建物201・202とともに、座標北に対して東へ $1^{\circ} 30'$ 程の同じ振れをもつ。建物202はⅡ期、建物201はⅢ期の遺物が出土しており、建物201は建物202の建て替えの関係にあるものと考えられ

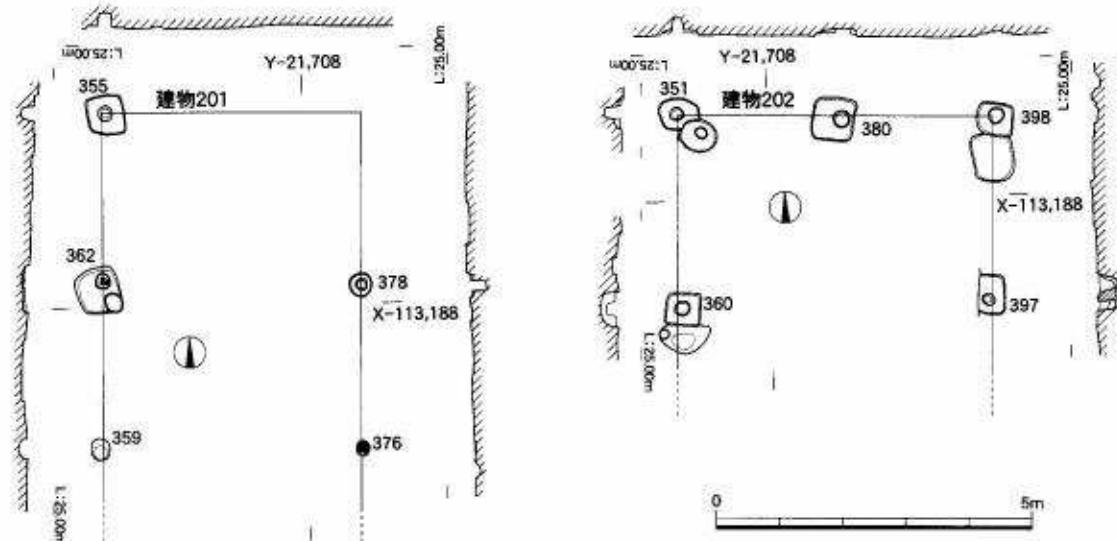


図5 建物201・202実測図 (1/120)

る。

池338 (図4・図版1・4の2・7の4)

調査区東部の北端に位置する。東西長3.3m、南北長1.5m以上半円に近いすり鉢状の掘形をもつ。北半部は調査区外のため不明である。深さは0.7mを測る。掘形内の堆積土は一部に砂層を挟む褐灰色泥土層で、底には腐植土層が厚く堆積していることから池状遺構と判断した。庭園遺構の一部とすると溝340とつながっている可能性が考えられるが、出土遺物にやや隔たりが認められる。あるいはまた、掘形内より繩の羽口が出土していることなどから工房遺構に関係するものとも考えられる。Ⅱ期古の土器類が出土している。

溝340 (図版1・4・5の2)

調査区の西端部付近に位置する。建物201と切り合い関係があり、溝340の方が古期に属する。北北東から南南西にゆるやかに蛇行した流れをもつ。溝の北部は1.5m程の幅をもち、そこから急に0.5m幅にすぼまって流れ出る。残存深5cmと浅い。溝底の北端と南端で0.25mの落差がある。庭園に伴う遺水の可能性が考えられる。Ⅲ期古までの土器類が出土している。

土壤385 (図版1・4・5の2)

調査区の中央西部に位置する。一辺1.4mの隅丸方形の掘形をもつ。深さは0.3m程で底は平坦である。埋土は黒褐色泥砂層、黒褐色泥土層の上下2層に分かれ、上層に瓦を多く含む。土器類の中には、硯に転用したとみられる須恵器の甕や灰釉陶器の碗などが数点あり、特徴を示すが、遺構の性格は不明である。Ⅱ期～Ⅲ期。

落ち込み405 (図版1・4の1・5の1)

調査区の東南角部に位置する。東西6m以上、南北3m以上、調査区外・烏丸小路西築地に向かって広がって行く様相をもつ浅い落ち込みである。堆積土の黒色泥土層などから判断して自然の湿地と考えられる。

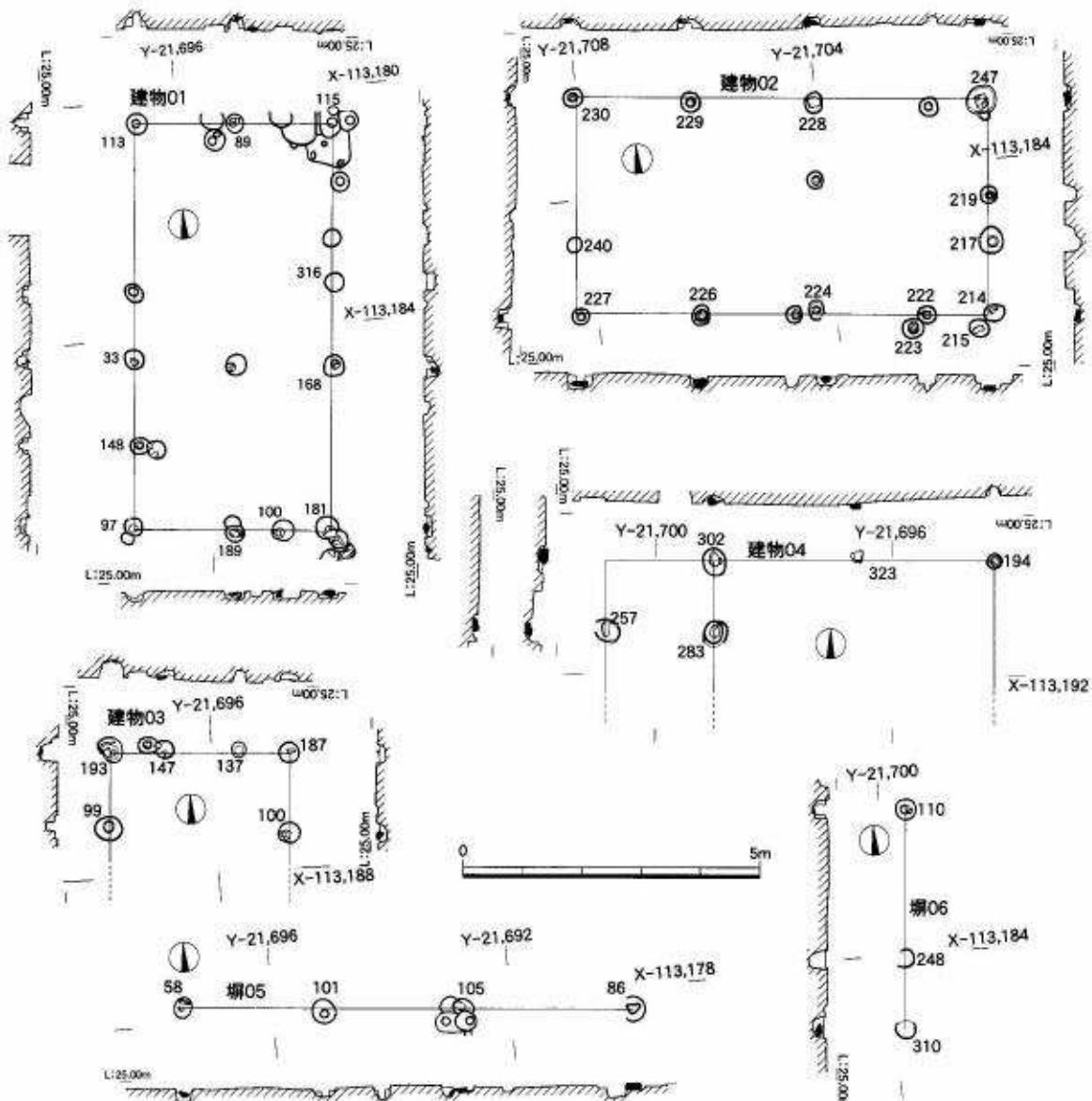


図6 建物01～04・塀05・06実測図 (1/120)

鎌倉時代から室町時代

第13層（整地層1）を除去した第2面（第14層上面）において掘立柱跡を240基以上検出した。平安時代の建物が調査区の西部に限られていたのに対して、調査区全域に広がる。柱穴はいずれも径0.3～0.5m程の比較的小さな掘形をもち、それらのうち四分の一は柱の底に根石を据えている。建物跡の他には井戸2基、溝、土壙、集石遺構などがある。

建物01（図6・図版1・2の2・3・6の2と3）

調査区の中央東部に位置する。東西2間（3.3m）、南北5間（6.8m）の南北棟である。梁間・桁行ともに柱間が5尺前後と小振りな建物である。柱穴の掘形はいずれも径0.3～0.4mで、残存深0.2～0.3mを測る。柱穴115は柱根が焼けて炭化した状態で出土した。柱穴89・168・181・189は根石が残存する。

建物は、座標北に対して東へ5°弱の振れをもつ。

建物02（図6・図版1・2の2・3の1・6の4～6）

調査区の中央西部に位置する。建物01の西側4mにある東西棟である。東西4間（6.9m）、南北3間（3.6m）である。桁行の柱間寸法は7尺弱で、東端のみ3尺前後と狭い。東側に庇がつく可能性がある。梁間の柱間寸法は4尺等間であろうか。柱穴の掘形は建物01とほぼ同じ規模である。建物の四隅の柱及び228・229・224・226の柱底には根石を据える。建物全体がやや菱形に復原できる。座標北に対して東へ5°強の振れをもつ。

建物03（図6・図版1・2の2・3・6の2）

調査区の中央東南部に位置する。建物01と重複関係にある。東西3間（3m）、南北1間以上のおそらく南北棟である。桁行の柱間は4尺強、梁間の柱間寸法は3・4・3尺である。柱穴100・147・187・193の柱底には根石を据える。座標北に対して東へ4°弱の振れをもつ。

建物04（図6・図版1・2の2・3の2・6の7）

調査区の中央南端部に位置する。東西3間（6.5m）、南北1間以上のおそらく南北棟である。南側が調査区外となり全形を知り得ない。この建物は西側に庇がつく。身舎部分の梁間の柱間寸法8尺、庇の柱間6尺を測る。桁行の柱間4尺である。柱穴257・283・302・323の柱底には根石を据える。建物の軸はほぼ座標北を示す。

塙05（図6・図版1・2の2・3の1）

調査区の東部北辺に位置する。東西3間（7.6m）の塙である。建物01の北側2.5m離れたところに位置し、同じ振れをもつ。柱間寸法は8・8・10尺である。柱穴58・86・105の柱底には根石を据える。

塙06（図6・図版1・2の2・3）

調査区の中央部に位置する。南北3間（3.6m）の塙である。建物01と建物02の間にある。柱穴は3基のみ残存し、柱間は4尺等間となろう。両端の柱穴の柱底には根石を据える。建物01と同じ振れをもち、塙05との延長線上において直交関係にある。

井戸312（図7・図版1・2の2・3の2・4の1・5の2・7の2と3）

調査区の中央部南端部に位置する。方形縦板組の井戸である。近年の建物基礎により南半が攪乱されていたが、木枠本体はかろうじて攪乱

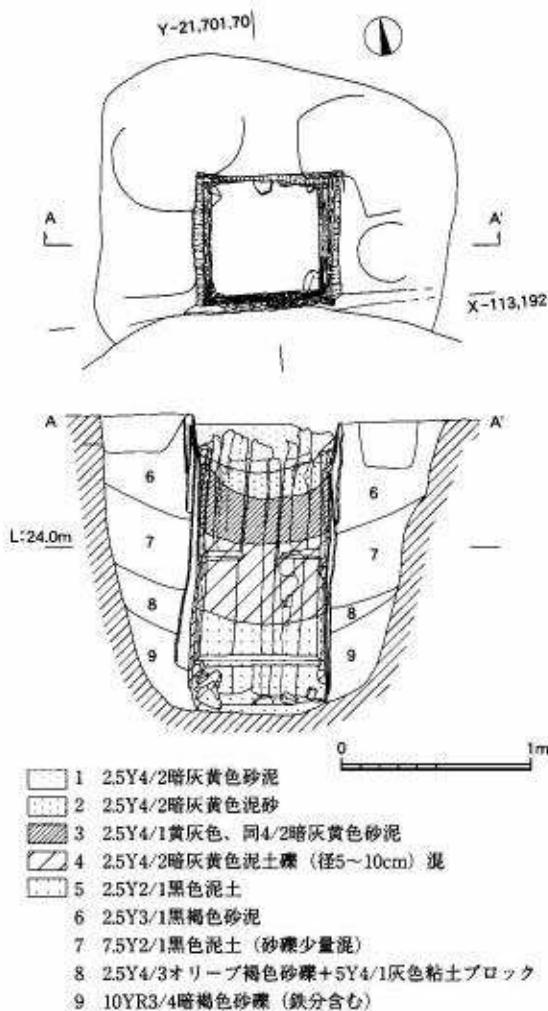


図7 井戸312実測図（1/40）

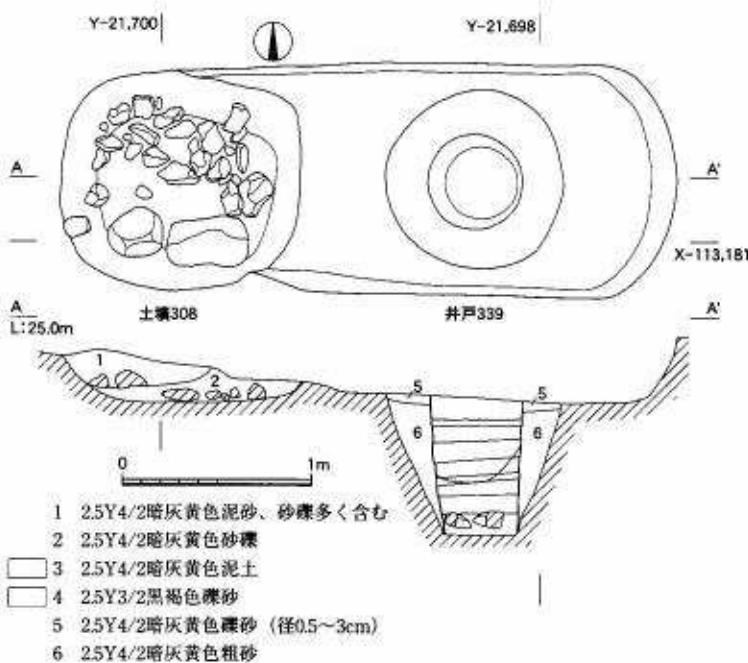


図8 土壌308・井戸339実測図 (1/40)

る。井戸339の西側1m程のところにある集石遺構である。東西長1.3m、南北長1.2mの隅丸方形の掘形をもち、深さ0.3mを測る。掘形内の南壁には長さ0.4mと0.3m程の2個体の石を並び据え、北半部には拳大から人頭大の石を敷き詰めたような状態を呈する。井戸339に隣接することから、当初井戸に付隨する施設と考えたが、井戸とは時期差が認められ、他の何らかの作業場と考えられる。

井戸339 (図8・図版1・2・3・4・7の1)

調査区の中央北部に位置する。径0.4~0.5mの曲物を数段積み上げたいわゆる曲物井戸である。井戸の深さは遺構面より1mを測る。井戸内埋土は上下2層に分層できるが、上層は泥土層であるが、下層は地山と同質の礫砂層である。

溝260・266 (図版1・2の2・3の1)

調査区の西部に位置する。いずれも南北溝である。溝260は幅0.4m、深さ0.1mの浅い溝である。9m長残存する。溝266は幅0.2~0.6m、深さ0.1m程で南側でやや広がりをもつ。17m以上残存する。両溝とも同じ振れをもち、溝の心心間7.5mを測る。

土壌256 (図版1・2の2・3の2)

調査区中央南部に位置する。東西長0.7m、南北長0.9mの楕円形の掘形をもち、深さ0.15mを測る。埋土はオリーブ黒色砂泥層である。

IV 遺 物

出土遺物は整理箱に35箱ある。時代は平安時代から江戸時代のものがある。遺物の種類には土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦類、土製品、木製品、石製品、金属製品、錢貨などがある。以下図示したものを中心に関要なものについて述べる。

を免れていた。掘形は東西長1.9m、南北長1.5m以上の規模をもち、隅丸方形を呈する。井戸枠は一辺0.7mを測る。幅0.15~0.2mの縦板4枚を一面として横桟と隅木で支持する。横桟は3段残存する。各側板の背後には二重三重の裏込板を充て補強する。井戸枠の残存高1.5mを測る。井戸内埋土は5層程に分層できる。

土壌308 (図8・図版1・2の2・3・4・6の8)

調査区の中央北部に位置す

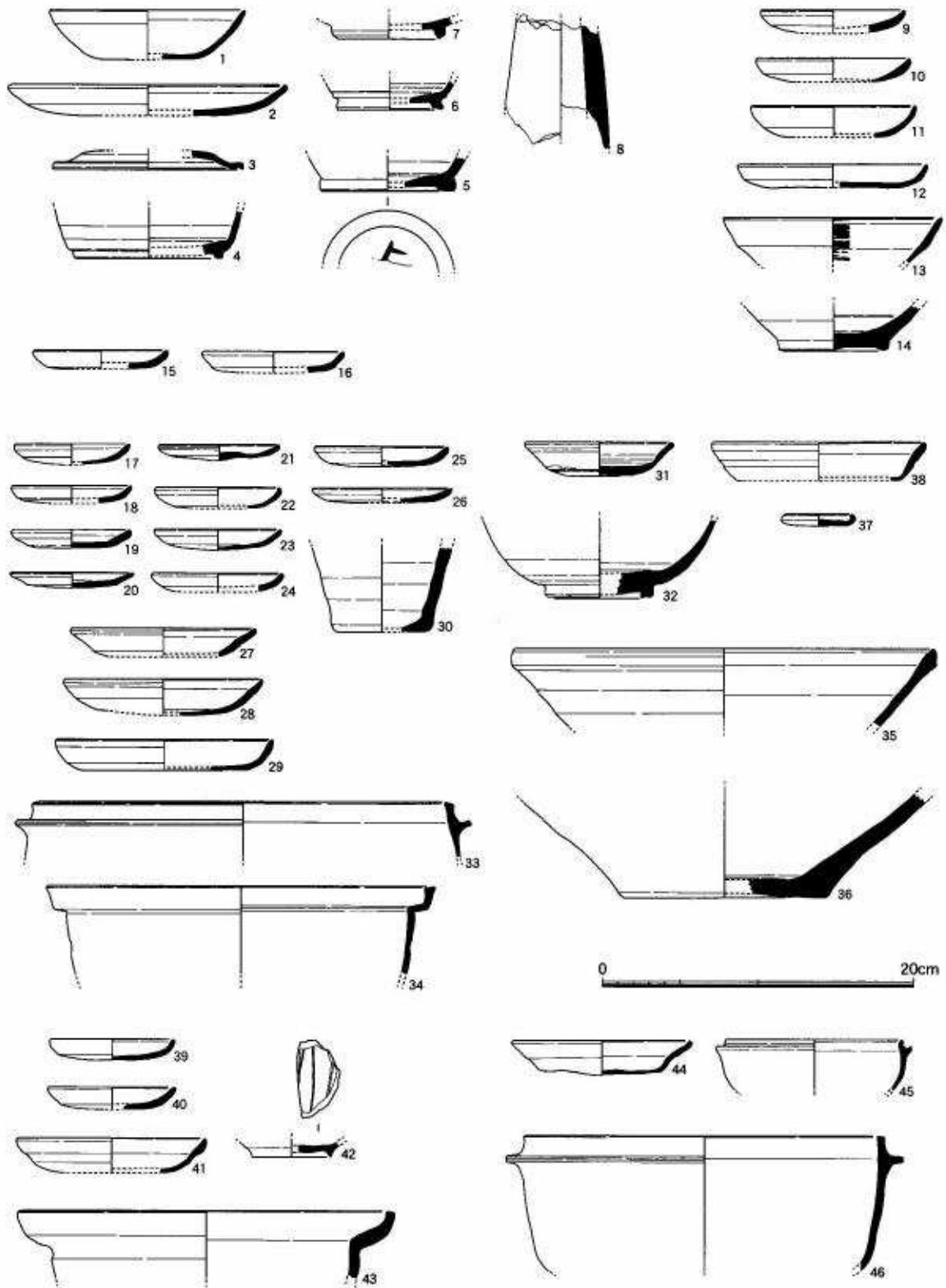


図9 池338（1～8）・落ち込み405（9～14）・土壙308（15・16）・井戸312（17～36）・井戸312（37・38）・井戸339（39～43）・土壙256（44～46）出土遺物実測図（1/4）

土器・陶磁器類

池338出土土器（図9・図版8）

土師器、須恵器、灰釉陶器などがある。

土師器には椀1、皿A2がある。それぞれe手法で、外面のケズリの痕跡は認められない。椀は、都城域で出土する主流タイプのものではない。皿Aは口縁端部の返りも明瞭で作りも比較的丁寧である。須恵器は杯B蓋3、同杯B身4、同壺底部5がある。5の高台内には墨書痕跡が認められるが判読はできない。灰釉陶器は椀6、7がある。土師器から見ると京都Ⅱ期古を前後する時期幅でこの土器群をとらえることが出来る。

落ち込み405出土土器（図9・図版9）

土師器は皿Nの小型9～11、中型の12がある。13は瓦器椀で、器表内外面に炭素が吸着しやや銀化する。内面はやや粗い暗文が認められ、口縁内端には明瞭な沈線がめぐる。外面は口縁外周まで横ナデが及び、以下は指オサエでミガキはしない。14は輸入磁器で中国産の白磁碗である。京都V期中～新の幅に収まる土器群と考えられる。

土塙308出土土器（図9）

土師器皿Nの小型のもの15、16がある。土師器皿の型式は京都VI期中を前後する時期と見ていい。る。

井戸312出土土器（図9・図版8）

木枠内より土師器17～30、輸入磁器31・32、瓦器33・34、須恵器35、焼締陶器36が出土している。土師器皿N小型17～26、同N大型27～29は京都VI期新～同VII期古の幅でとらえられる。30は粗製の鉢の底部で、粘土紐の継ぎ目を残す。体部から口縁部に向かい緩やかに開く形のもので、この時期の共伴例が多いものである。中国産の青磁皿31、同碗32はいずれも文様は認められない。31は同安窯系、32は竜泉窯系の製品と見られる。33は瓦器の羽釜、34は瓦器の鍋である。35は東播磨産の須恵器の鉢で焼成はややあまい。36は焼締陶器甕の底部で、常滑系のものであろう。

掘形より37、38が出土している。37は土師器皿Ac、38は同皿Nの大型で、木枠内出土のものと大きな時期差はない。

井戸339出土土器（図9・図版9）

39・40は土師器皿Nの小型、41は皿Nの大型である。京都VII期古～同中の幅に収まる型式のものと見ていい。42は瓦器椀の底部で、内面に粗い暗文が施されている。43は瓦器の鍋である。

土塙256出土土器（図9・図版9）

44は土師器皿Nの大型で、京都VII期中～新の幅に収まる型式のものである。45はミニチュアの土師器羽釜で、土師器皿京都VII期前後の型式のものと共伴例が多い遺物である。46は瓦器の羽釜である。

土製品

轆羽口（8）（図9・図版8）

池338から出土している轆の羽口である。胎土に小石や薬状のものが混じる。炉に近い部分は表面が灰色、胎土は淡橙赤色に変色する。



瓦類

均整唐草文軒平瓦（47）（図10・図版9）

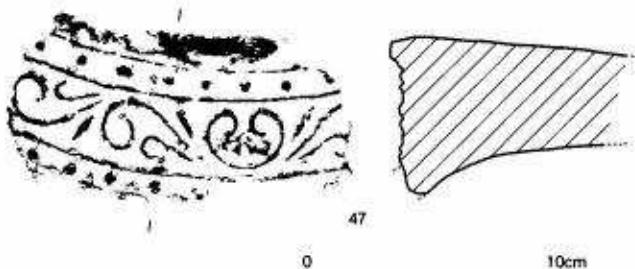


図10 井戸312・他出土軒瓦拓影・実測図（1/3）

井戸312木枠内第4層から出土。胎土は精良でN6/0灰色を呈し、焼成は良い。凹面、凸面ともナデ調整。平城宮6691A型式とされるもので、搬入瓦である。この型式の京城での出土例は西寺、大極殿、民部省、太政官などがあり類品は多い。

剣巴文軒平瓦（48）（図10・図版9）

第13層出土。中央に二巴文をおき、左右に剣頭文を配す。折り曲げて瓦当部を成形し施文する。頸部には縄目のタタキ、瓦当裏面はナデ調整、凹面には布目の痕跡を残す。胎土は2.5Y7/1灰白色～N6/0灰色を呈し、焼成はややあまい。

V 小 結

今回の調査において判明した主要な遺跡のあり様は、平安京II期～III期の建物遺構群、VI期～VII期にかけての建物遺構群、そしてそれ以降の耕作に伴う遺構群と三群に大別できる。

第3面遺構面において検出した平安京II期～III期の遺構群のうち、建物202と池338が最古期に位置づけることができる遺構である。ともにII期古（9世紀中頃）までの土器類が出土している。九条家文書（承久2年6月18日の条）によれば、平安時代前期当地には施薬院の御倉が置かれていたことが記されており、建物202は御倉に付随する建物と考えられる。また池338からは轆の羽口が出土しているが、この池338は建物202から離れたところにあり、烏丸小路寄りの十町の東辺部にあたることからも、この付近に御倉に関連する何らかの工房跡があったことが推定できる。溝340はIII期前半（10世紀前半）までの土器類が出土しており、建物202とは時期的な隔たりがあるが、建物202と同時期に位置づけることも可能であろうか。溝340が埋られた後に建物201が建てられている。建物201は建物202の作り替えと考えられ、III期の土器類が出土している。

III期以降、IV期・V期の明確な遺構は検出できなかったが、第2面遺構面において、平安京VI期～VII期の建物群を検出した。調査地の西四行北三門・四門全域にわたって建物群が存在する。掘立柱建物跡はほとんどがVI期～VII期前半（13～14世紀前半）に属するものである。柱跡

はいずれも比較的小振りであるが、多くの柱跡には、柱底に根石を据えており、丁寧な造作がうかがえる。建物01の北東角柱穴115は柱根が焼けて炭化した状態で出土していることから、この建物は焼失したものとみられる。また柱穴の密集した出土状況より判断して、鎌倉時代全体を通して頻繁に建て替えが行われたことが認められる。九条家文書によれば鎌倉時代には当地は九条家の領地となったことが記されており、これらの建物群が九条家に関係するものである可能性は高い。第2面の建物群の内、建物04は他の建物群に比較して北に対して振れがほとんどなく、やや復原に無理があるかもしれない。

平安時代前期から中期の建物群が東に1°程の振れをもつていて、鎌倉時代の建物群は東に4~5°の振れをもっている。このような状況は今までの平安京における古代から中世にかけて建物の振れが東に振れていくという調査成果と相応している。また室町以降近代までの耕作に伴う溝などの多くは、鎌倉時代の建物群の振れと同じ偏りが認められ、宅地が耕地化していく過程で、鎌倉時代の土地利用の区画がそのまま踏襲されてきたことがうかがえる。

今までの周辺の調査では、とくに烏丸小路以東の調査においては、近世における土取穴（九条土）などによって建物遺構などが破壊されていることが多い、良好な遺跡の検出が皆無であった。しかし、今回の調査においては、平安時代から鎌倉時代にかけての遺構がきわめて良好な状態で遺存していることが判明した。このことは当地が平安時代の初めに国家施設としての施薬院の御倉が置かれ、のちに九条家の領地に組み込まれていったことによる歴史的背景が大きな理由となったものと考えられる。

以上、本調査においては貴重な成果を上げることができた。これもひとえに株式会社中川工務店の埋蔵文化財に対する深いご理解と全面的なご協力のおかげであり、末筆ながらあらためて御礼申し上げる次第です。

註1 角川日本地名大辞典 26京都府 角川書店 1991年

日本歴史地名体系27 京都市の地名 平凡社 1979年

『史料京都の歴史13 南区』 平凡社 1992年

註2 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年」「研究紀要第3号」

(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1996年

表1 遺物観察表

池338(図9・図版8)

番号	種類	器形	口径	器高	胎土	色調	備考	層位
1	土師器	椀	12.4	(3.2)	精良	2.5Y8/2 灰白色		第1層
2		皿A	17.5	(2.0)	精良	10YR8/2 灰白色～10YR7/2 にぶい黄橙色		第3層泥土
3	須恵器	杯B蓋	12.1	(1.2)	精良	N 6/0 灰色		第1層
4		杯B身			精良	N 6/0 灰色		第2層
5		壺			精良	2.5Y8/1 灰白色		第1・2層
6	灰釉	椀?			精良	N 7/0 灰白色		第1層
7		椀			精良	N 8/0 灰白色		第1層
8	土製品	繩羽口			良	10YR8/2 灰白色		第2層

落込み405(図9・図版9)

番号	種類	器形	口径	器高	胎土	色調	備考	層位
9	土師器	皿N小	9.2	(1.5)	良	2.5Y7/2 灰黄色		
10			9.8	(1.5)	良	2.5Y7/2 灰黄色		
11			10.4	(2.1)	精良	2.5Y7/2 灰黄色		
12			12.0	(1.5)	精良	10YR7/2 にぶい黄橙色		
13	瓦器	椀	14.0		良	5Y8/1 灰白色	器表炭素吸着	
14	輸入磁器 白磁	碗			精良	釉: 7.5Y7/1 灰白色 胎土: N7/0 灰白色		

土壤308(図9)

番号	種類	器形	口径	器高	胎土	色調	備考	層位
15	土師器	皿N小	8.5	(1.2)	精良	10YR7/3 にぶい黄橙色		
16			9.0	(1.3)	精良	2.5Y6/1 黄灰色	(集石)	第2層

井戸312(図9・図版8)

番号	種類	器形	口径	器高	胎土	色調	備考	層位
17	土師器	皿N小	7.3	(1.3)	良	2.5Y7/2 灰黄色		木枠内第2層
18			7.6	(1.1)	精良	10YR7/2 にぶい黄橙色		木枠内第1層
19			7.5	1.2	精良	10YR7/2 にぶい黄橙色		木枠内第3層
20			7.8	1.0	精良	2.5Y7/2 灰黄色		木枠内第5層
21			7.6	1.0	精良	2.5Y7/2 灰黄色～2.5Y6/1 黄灰色		木枠内第5層
22			7.9	(1.3)	精良	10YR7/2 にぶい黄橙色		木枠内第4層
23			8.0	(1.4)	精良	2.5Y7/2 灰黄色		木枠内第3層
24			8.2	(1.2)	精良	2.5Y7/2 灰黄色		木枠内第3層
25		皿N大	8.4	(1.3)	精良	2.5Y7/1 灰白色～2.5Y7/2 灰黄色		木枠内第5層
26			8.8	(1.0)	精良	7.5YR7/4 にぶい橙色		木枠内第5層
27			11.8	(1.8)	良	10YR7/2 にぶい黄橙色～2.5Y5/1 黄灰色		木枠内第3層
28			12.6	(2.4)	良	7.5YR7/3 にぶい橙色～10YR7/3 にぶい黄橙色		木枠内第3層
29			13.8	(2.0)	精良	10YR7/2 にぶい黄橙色		木枠内第5層
30	土師器	鉢			精良	2.5Y7/1 灰白色～2.5Y7/2 灰黄色		木枠内第5層
31	輸入磁器 青磁	皿	9.3	2.2	精良	釉: 5Y5/2 灰オーブ色 胎土: 5Y7/1 灰白色		木枠内第4層
32		碗			精良	釉: 10Y5/2 オリーブ灰色 胎土: N6/0 灰色		木枠内第4層
33	瓦器	羽釜	26.0		精良	2.5Y8/2 灰白色	外面煤付着	木枠内第5層
34		鍋	24.8		精良	2.5Y7/1 灰白色	外面煤付着	木枠内第4層
35	須恵器	鉢	26.8		精良	2.5Y7/1 灰白色	外面煤付着 内面煤・酸化物付着	木枠内第5層

番号	種類	器形	口径	器高	胎土	色調	備考	層位
36	焼締陶器	甕			精良	器表: 2.5Y6/2 灰黄色～10YR5/3 にぶい黄褐色 胎土: 10YR8/2 灰白色		木枠内第5層
37	土師器	皿 Ac	4.2	0.8	精良	10YR8/2 灰白色		掘形
38		皿N大	13.6 (2.5)		精良	2.5Y7/1 灰白色		掘形

井戸 339 (図9・図版9)

番号	種類	器形	口径	器高	胎土	色調	備考	層位
39	土師器	皿N小	7.9	1.4	精良	2.5Y6/2 灰黄色～2.5Y5/1 黄灰色		下層
40			8.0 (1.5)	良		2.5Y7/2 灰黄色	灯芯痕	上層
41		皿N大	12.1 (2.3)	精良		10YR7/2 にぶい黄橙色	二次被熱	下層
42	瓦器	椀			精良	5Y8/1 灰白色	器表炭素吸着	上層
43		鍋	23.4		良	N 7/0 灰白色	外面煤付着	下層

土壤 256 (図9・図版9)

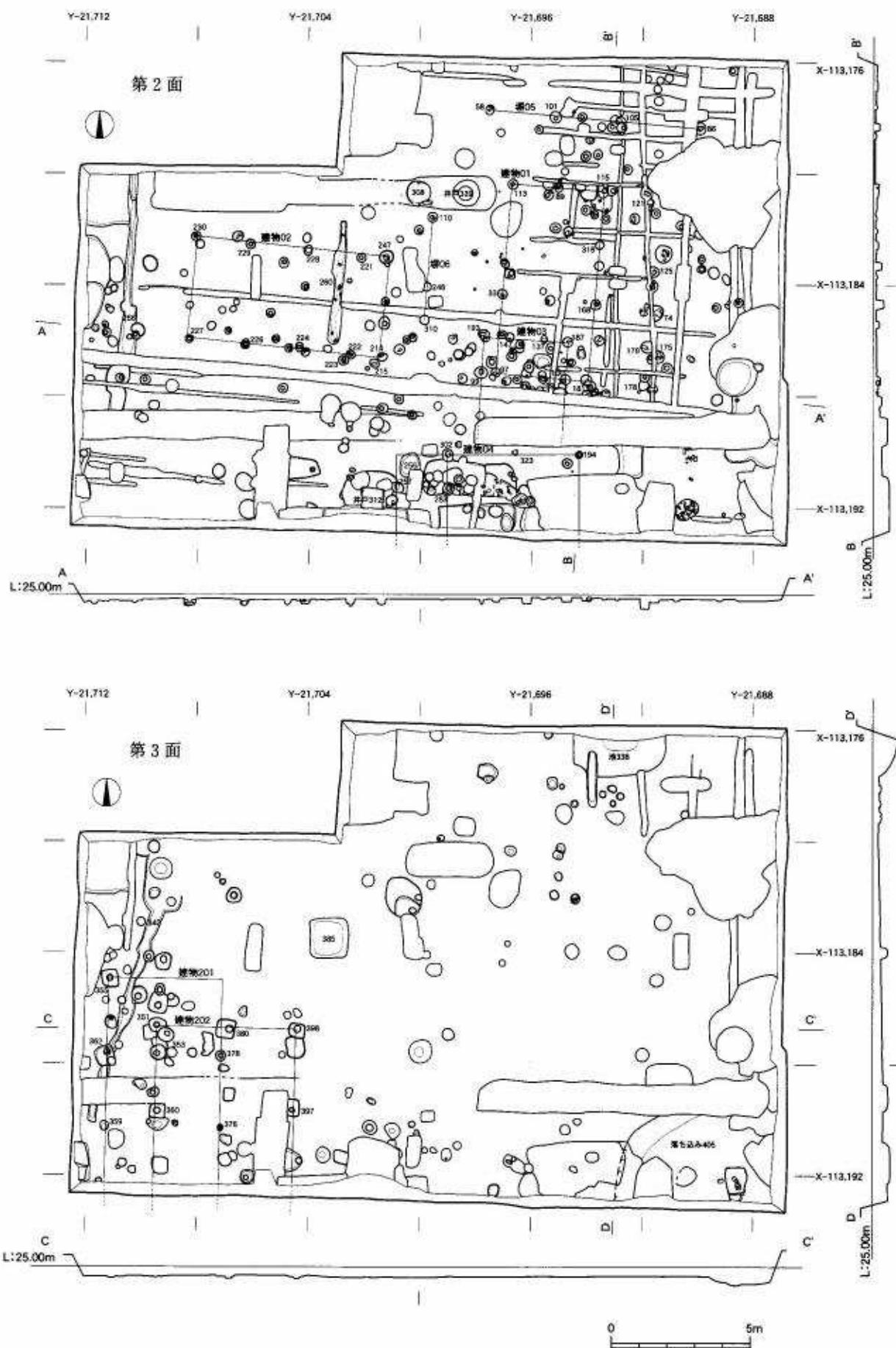
番号	種類	器形	口径	器高	胎土	色調	備考	層位
44	土師器	皿N大	11.3	1.7	良	10YR7/2 にぶい黄橙色～7.5YR7/3 にぶい橙色		
45		ミニチュア羽釜	11.3 (3.2)	精良		2.5Y8/2 灰白色		
46	瓦器	羽釜	23.0		良	2.5Y7/2 灰黄色～N4/0 灰色	外面煤付着	

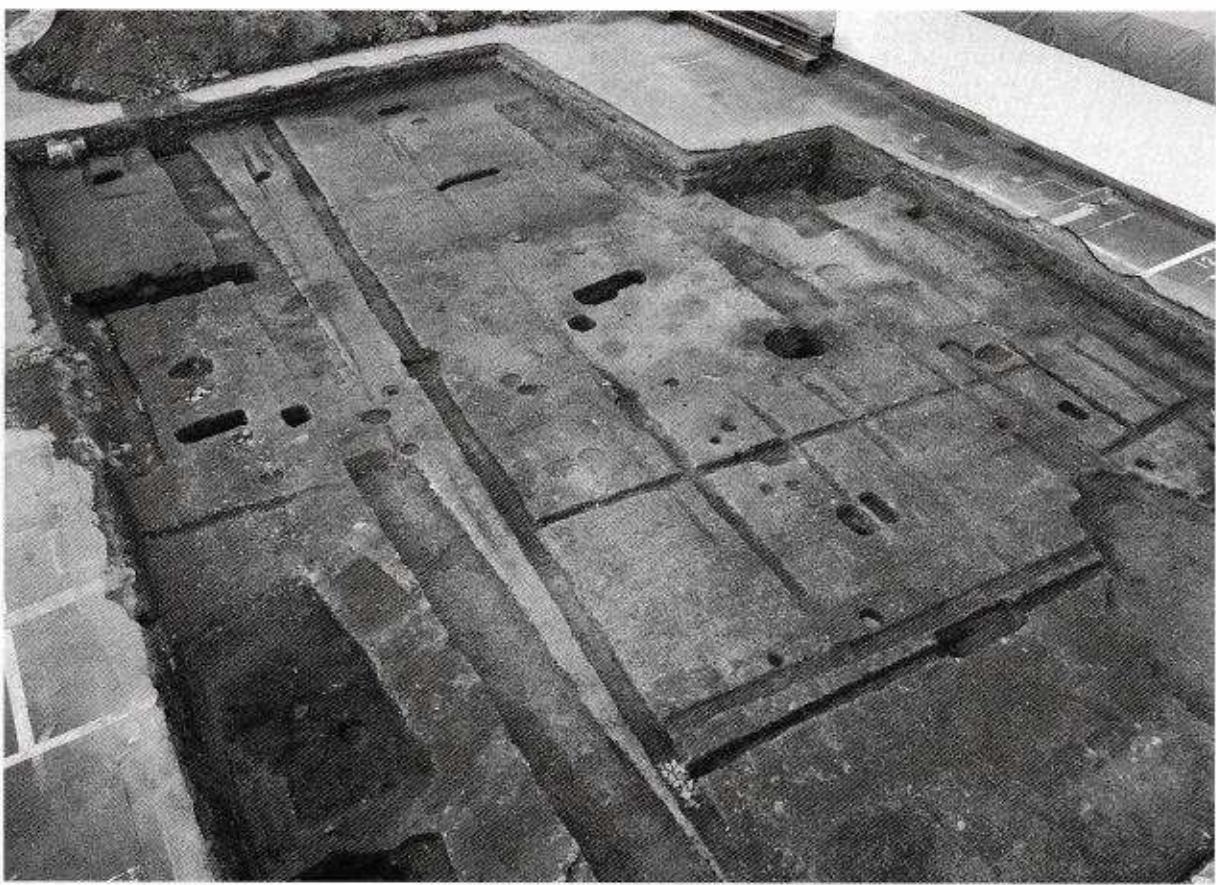
報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうくじょうさんほうじゅっちょう							
書名	平安京左京九条三坊十町							
副書名	パシフィックレヴュー京都駅前新築に伴う調査							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	家崎孝治 上村憲章							
編集機関	古代文化調査会							
所在地	〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404							
発行年月日	2006年1月23日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平安京左京 九条三坊十 町跡	京都市南区 東九条上殿田 町31-1	市町村	遺跡番号	34度 58分 57秒	135度 45分 33秒	20041125 ～ 20050124	400m ²	マンション建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京左京 九条三坊十 町跡、烏丸 町遺跡	都城跡、集落跡	平安時代 ～江戸時代	土壙、池、溝、 掘立柱穴、塀、 井戸跡	土師器、須恵器、 綠釉陶器、灰釉 陶器、輸入陶磁 器、瓦器、焼締 陶器、軒瓦	施薬院の御倉に 伴う建物跡 九条家に関連す る建物跡			

図 版

図版一 遺跡

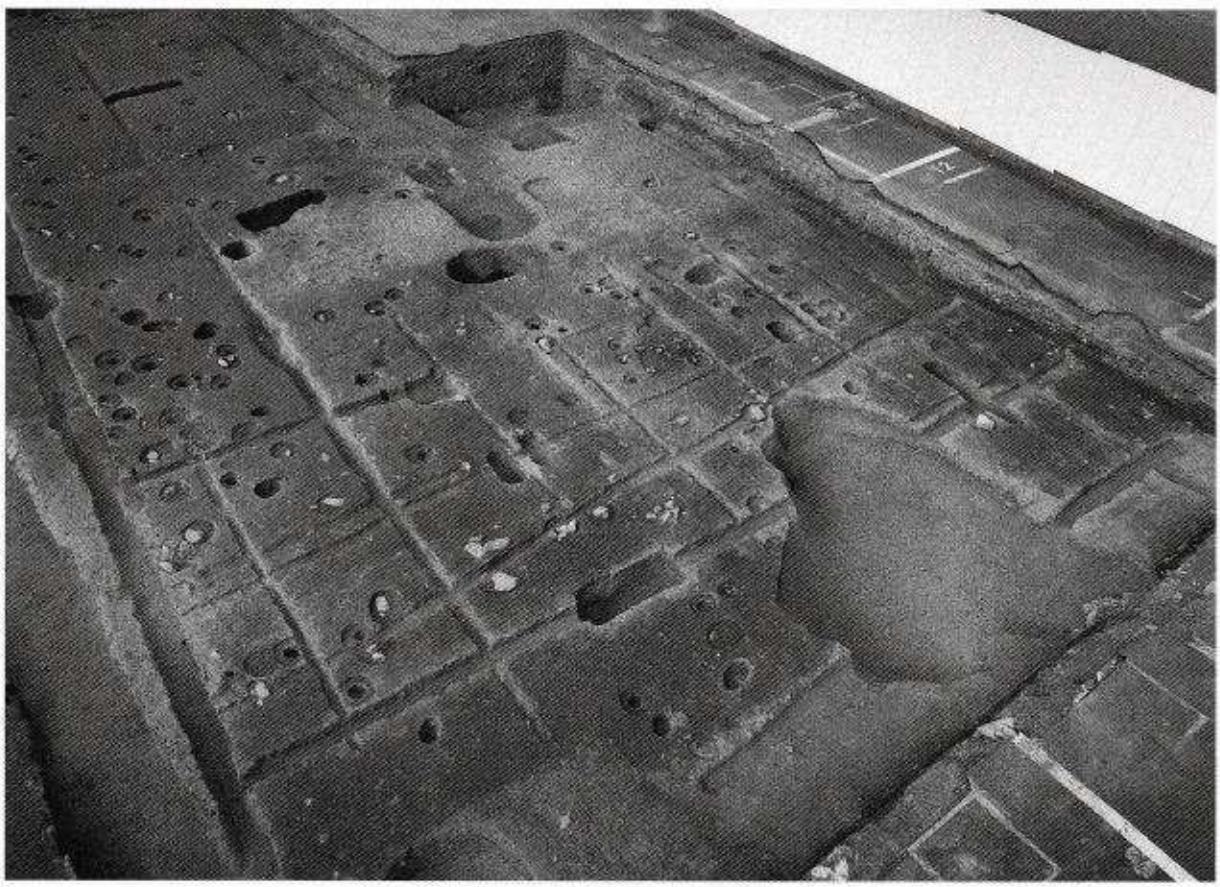




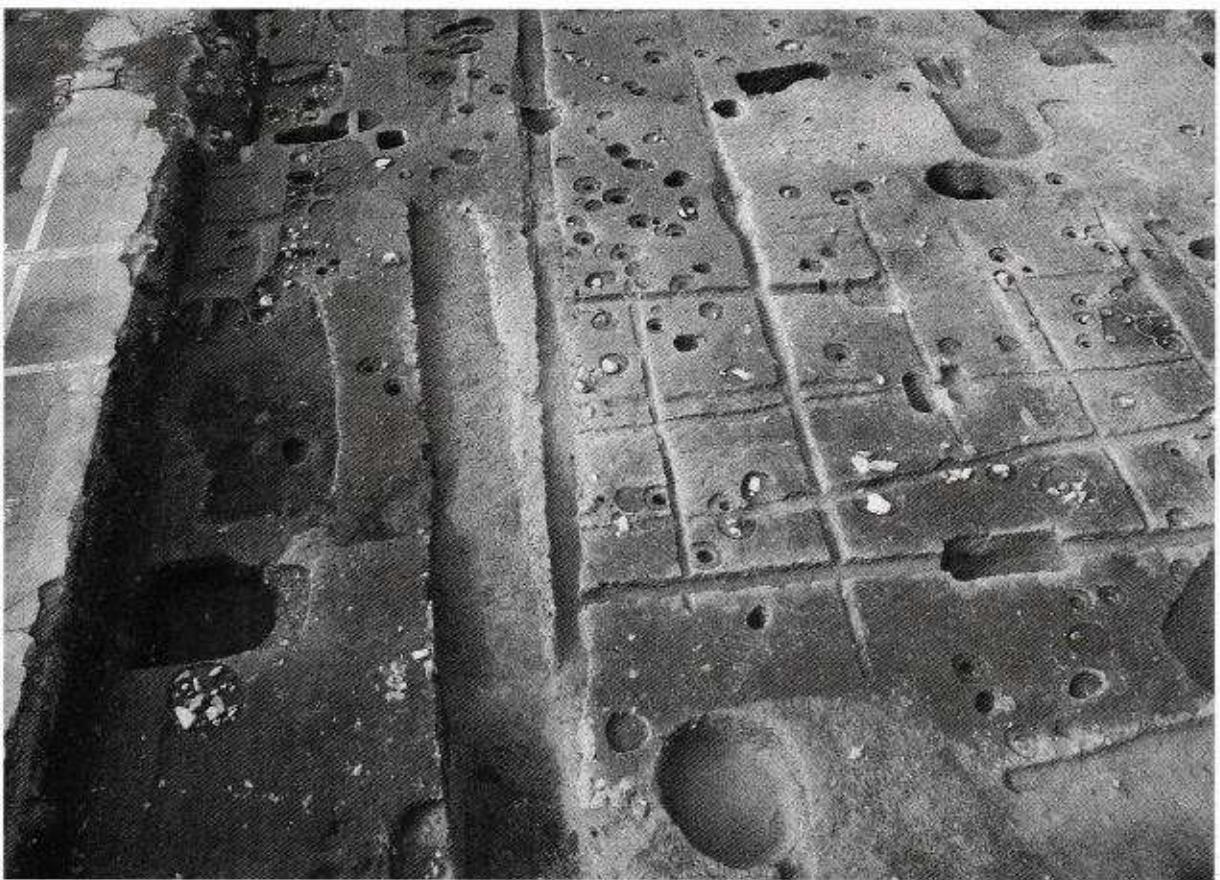
1 第1面全景（南東から）



2 第2面全景（東南東から）



1 第2面全景東部（南東から）



2 第2面全景東南部（東から）



1 第3面全景（東から）



2 第3面北西部（南東から）



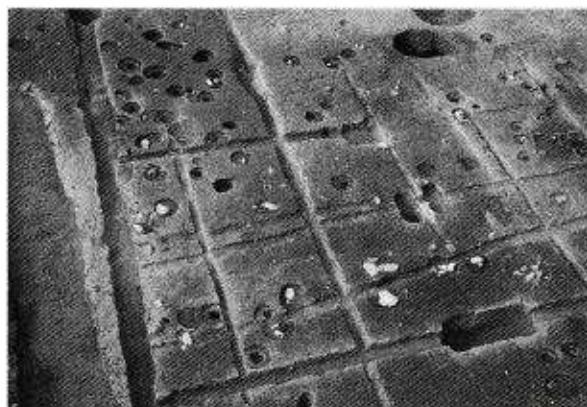
1 第3面東南部（東から）



2 第3面西部（東から）



1 調査地遠景（東から）



2 建物01・03（東から）



3 柱穴113〔建物01〕（東から）



4 建物02（東から）



5 柱穴226〔建物02〕（西から）



6 柱穴230〔建物02〕（西から）



7 柱穴302〔建物04〕（東から）



8 土壌308（南から）



1 井戸339 (南から)



2 井戸312 (南から)



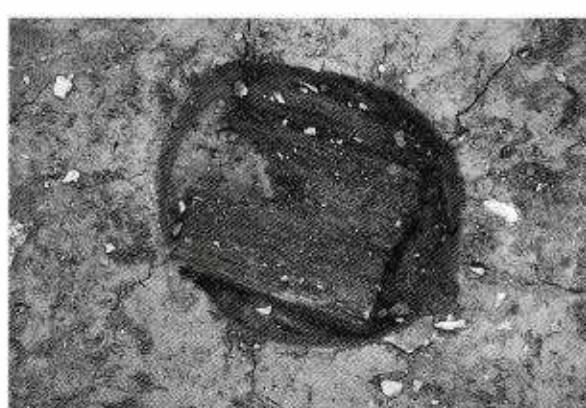
3 井戸312断ち割り状況 (南から)



4 池338 (南から)



5 柱穴362 [建物201] (東から)



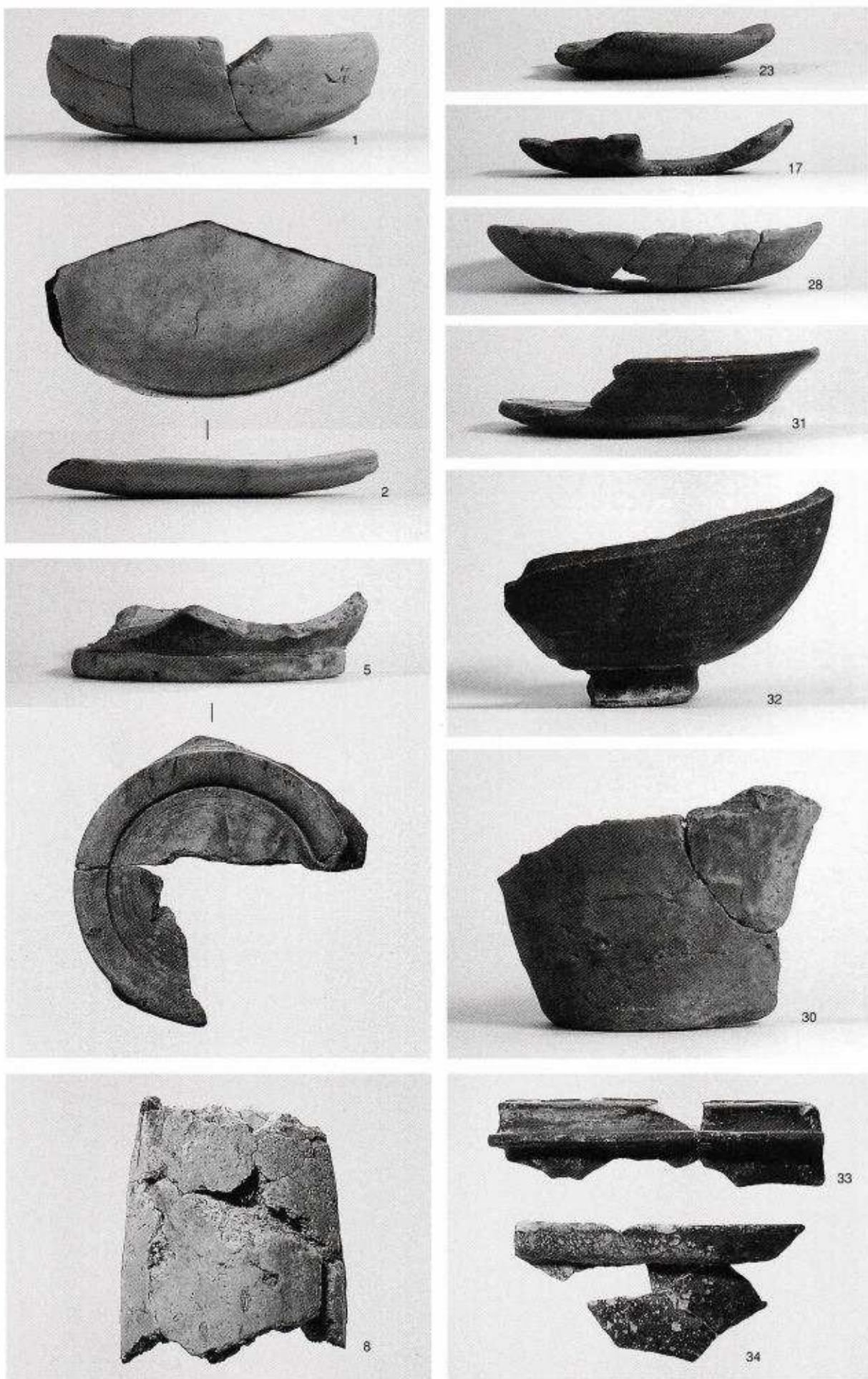
6 柱穴376 [建物201] (東から)



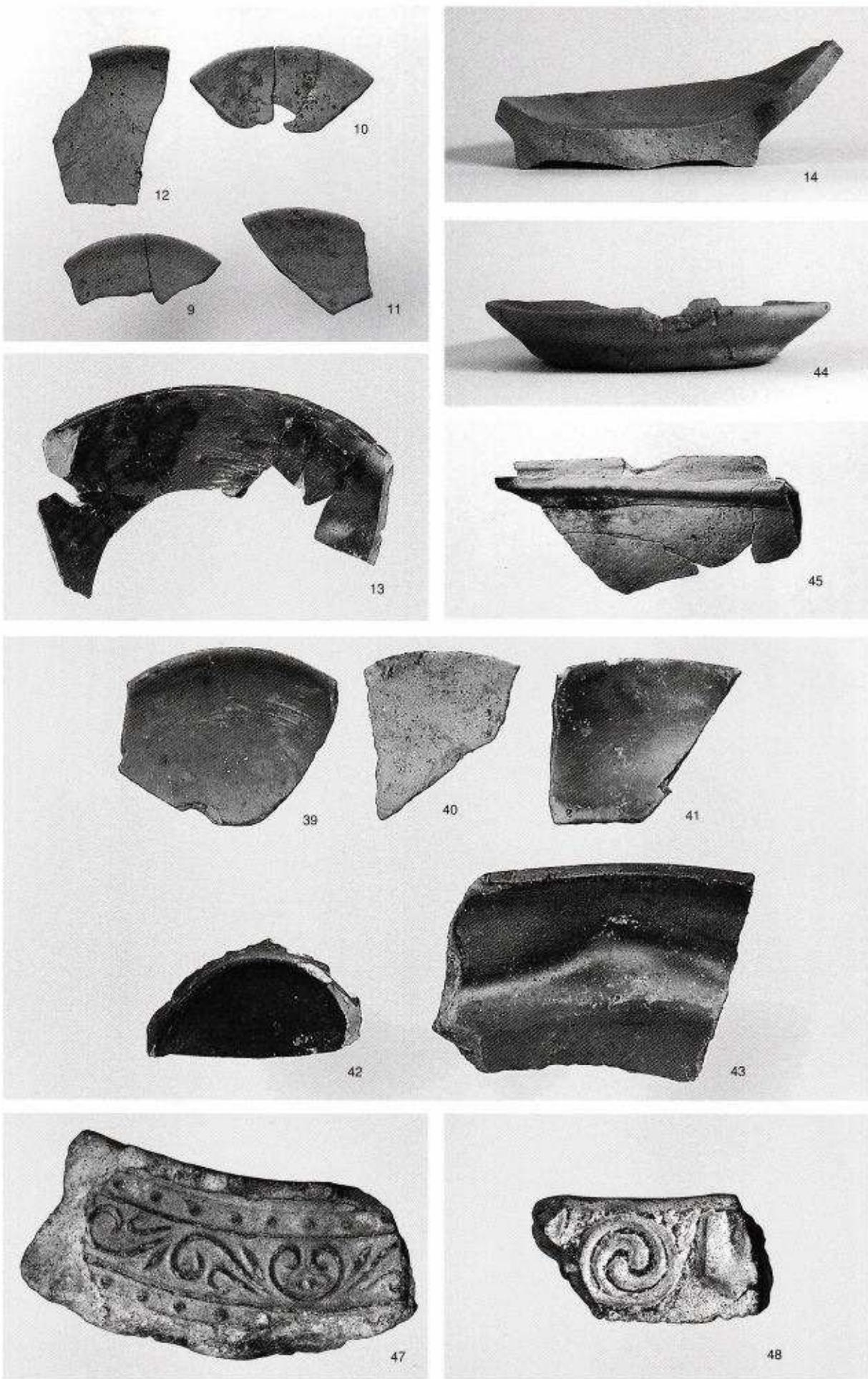
7 柱穴397 [建物202] (西から)



8 柱穴397断ち割り状況 [建物202] (西から)



池338 (1, 2, 5, 8)・井戸312 (17, 23, 28, 30~34) 出土遺物



落ち込み405 (9~14)・井戸339 (39~43)・土壤256 (44、45)・井戸312 (47)・第13層 (48) 出土遺物

平安京左京九条三坊十町

—パシフィックレビュー京都駅前新築に伴う調査—

発行日 2006年1月23日

編集行 古代文化調査会

住 所 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1-4-125-1404
TEL (078)857-6368

印 刷 真 陽 社
〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL (075)351-6034

